

〔第26回 学術集会特別講演Ⅰ〕

看護のレジェンド・ウーマンたち プライマリケアの先駆—19世紀イギリスの訪問看護の世界—

京都橘大学文学部

松浦 京子

イギリスにおける巡回訪問看護は、現在、1948年発足の国民保健サービスの主要分野として、在宅療養者への看護のみならず、プライマリケアの担い手として地域社会に定着し、社会福祉の重要な担い手である。こうした巡回訪問看護の源泉は、19世紀半ばに始まった民間篤志組織による組織的訪問看護活動であり、以来百年近くの民間活動の歴史を経て、公的社会制度となった。このような歴史経過をたどった背景には、その開始時以来、都市の貧民街で、また広域の郡部で、訪問看護というある意味孤独な活動を果敢に担い続けてきたクィーンズ・ナースに代表される地区看護師たち（言うなれば看護のレジェンド・ウーマンたち）の活動があったからである。では、そうした伝統の系譜を生み出したのは何であったのだろうか。その歴史的背景を紹介する。

19世紀後半のイギリス社会は、世界のヘゲモニー国家として未曾有の繁栄を誇る一方で、強固な階級制度の下で貧富の差の拡大が進み膨大な貧困層の堆積という現実を抱えていた。こうした事態に対して公的社会福祉が未整備であったがゆえに、民間レベルの諸活動が核となる「福祉の複合体」と呼ばれる社会保障体系が形成された。「複合体」においては、労働者階級の間で自助組織を作る動きも見られたが、中心的役割を果たしたのが労働者貧困層への給付・生活支援行う中流階級の慈善篤志組織（ボランティア・ソサエティ）活動であった。そして、その篤志組織活動のなかでとりわけ大きな戦力となったのが中流階級女性のディストリクト・ヴィジティング、すなわち中流階級女性自らが、もしくは専従



Nurses' rounds in Hackney c.1900

の訪問員を雇用して、地域の労働者家庭を定期的に巡回訪問し物資を配布したり、信仰、禁酒の勧めや生活改善のための指導を行ったりする活動であった。当時、「家庭の天使」であることを期待された中流階級女性は基本的には公的な社会活動から締め出されていたが、慈善活動は女性の本分的役割として奨励されており、また、女性自身も奉仕の精神や社会的貢献による自己確認・実現への欲求を持っていた。その結果数多くの中流階級女性が貧困層の救済活動に突き動かされていたのである。こうして19世紀半ば以降、多様な目的を掲げた女性ヴィジティング組織の活動が展開されるなか、その発展形として現れたのが巡回訪問看護活動であった。

貧困層の傷病者に対する看護・介護の提供は、カトリックのフランスなどでは17世紀から修道女に

よって担われており、プロテスタント国家のイギリスでも19世紀半ばにはそれに倣い宗教系組織による動きが生まれていた。そうした時期に登場したのが「クリミアの白衣の天使」と謳われたナイティンゲールであった。病院とは貧民対象の慈善病院でしかなかった当時あって上流階級に生まれながら奉仕の精神から貧民看護を志した彼女は、派遣されたクリミア戦争の野戦病院での活躍が報道によって広くイギリス社会に伝えられると一躍「時のヒロイン」となる。そして彼女の活躍を讃えて募られた基金を元に看護学校を設立することを皮切りに看護改革を推進していく。この看護改革の進展には、専門訓練を受けた「看護職者」すなわちトレインド・ナースの有用性、近代性に対して社会的な認知や期待が広がりつつあったことが作用していたと言える。と同時に、「トレインド・ナース職」を中流階級女性によって担われる専門職として確立するというナイティンゲール自身の思いも大きく関わっていた。そして、このナイティンゲールの思いに、上述した中流階級女性のなかに見られた奉仕の精神や社会貢献の意欲が呼応することで中流階級出身のトレインド・ナースが誕生し、また、彼女たちのなかから貧困層家庭への訪問看護を担う地区看護師が活動を始めるのであった。

いや、それだけではなく、同時期に醸成されつつあったフェミニズムも影響を与えた。当時のフェミニズムは、女性の地位の向上を目指して法的諸権利や教育改革を求める中流階級女性の運動であったが、なにより経済的自立を可能にする中流階級女性のための職業、それも自らの階級に相応しい職、すなわち専門職の開拓、獲得を求めており、この要求の具体例としての「トレインド・ナース職」に期待を寄せていたからである。

実際の巡回訪問看護の最初の篤志組織は、リバプールの一人の男性篤志家W・ラスボーンの発想から誕生した。彼は、貧困層の家庭に赴き看護に当たる者を従来のようなアマチュア的な信徒やボランティアの女性ではなくトレインド・ナースであるべ

きと考えナイティンゲールに協力助言を仰ぐ。同時に、実際の活動を支える仕組みには、中流階級女性のヴィジティング組織のやり方を踏襲する。ここに、看護の専門職者としてのトレインド・ナースの活動と、それを経済的かつ組織的に支える中流階級女性のボランティア活動とが結合する巡回訪問看護の伝統が誕生したのである。

ナイティンゲールの助言のもとにリバプールに開設された看護学校で養成されたトレインド・ナースが区割りされたリバプールの各区に配置され活動する一方で、その各区では彼女たちを支援するボランティアの女性（レディ監督と呼ばれた）が、必要な医薬品・食料の手配、医師、慈善組織との連携、ナースの生活の世話までを一手に引き受けるという体制であった。当時のナースやボランティア女性が残した報告を読むと、傷病者の回復、貧民救済へ強い意志、意欲が感じられるだけでなく、こうした活動に貧困層への教導者的役割と、それゆえの社会貢献を実感していたことがうかがえる。

トレインド・ナースの看護活動と中流階級女性のボランティア活動が結合した巡回訪問看護の組織（地区看護協会と呼ばれた）は、1860年代以降、リバプールに倣い、まずは都市部に、遅れて郡部でも徐々に結成されていった。この過程で、1875年、ロンドンに訪問看護の実践とそのための専門的な看護師の養成を目指した組織「貧民へのトレインド・ナース提供のための首都並びに全国協会」が誕生する。この組織の結成の準備段階から関わり、結成後は総監督ナースとして地区看護師の養成と実際活動の指揮監督に活躍したのがフローレンス・サラ・リー（のちのクレイヴン夫人）である。彼女は、医師の娘として生まれナイティンゲール看護学校に学んだ、いわゆるレディ・ナースの一人であり、その後は欧米8か国の病院での訓練と勤務を経て、普仏戦争時には野戦病院での看護指揮を執ったという圧倒的実績を持つトレインド・ナースであり、ナイティンゲールの信任も厚かった。その彼女の指導監督の下に訪問看護のノウハウが蓄積され洗練されて



5 (and cover) A nurse setting off on her calls.

いったのである。

そして、彼女によって発信されたメッセージが、訪問看護に携わるのは最もすぐれた看護師でなければならず、それゆえに知的な中流階級女性こそがふさわしいというものであり、絶対的な奉仕の精神と社会貢献を担うことへの自覚の涵養であった。このメッセージは、1889年の女王在位記念看護師インスティテュート（クィーンズ・インスティテュートと略称される）の設立によって明確化されより強固に実体化されることとなる。

クィーンズ・インスティテュートは、1887年のヴィクトリア女王在位50年を記念して全国の女性から寄付を募り基金が創られた時、女王自身が基金を貧民のための巡回訪問看護の発展のために用いると決定した結果誕生したものであり、女王からチャーター（公認）された訪問看護の全国統括組織

として、訪問看護のスペシャリストを養成し、養成したスペシャリストを全国各地の地区看護協会に派遣した。重要であったのは、派遣された彼女たちのもとを監督ナースが巡回して査察すると同時に指導支援を行う体制をつくりあげたことで、こうして巡回訪問看護の水準の全国的均質化と常時の維持向上を図ることが可能となったわけである。同時に各地への巡回訪問看護の普及を推進し、また人口の疎らな郡部においても訪問看護を提供しうる仕組みづくりにも着手している。実際、これ以降全国に地区看護協会が誕生していくこととなった。

このクィーンズ・インスティテュートで養成される訪問看護のスペシャリストは、修了時にインスティテュートの登録簿に名が記載され、女王より下賜される徽章を身に着ける荣誉に浴し、それゆえ女王陛下の看護師「クィーンズ・ナース」と呼ばれた。彼女たちは、まさにナイティンゲールが思い描いたとおりに中流階級出身の教養ある女性から選抜され、単身、全国各地に向かうのであるが、その呼び名に相応しい高い矜持を持って活動することを期待される存在であった。実際、当時活躍したクィーンズ・ナースの手記や機関誌の記事には、高い職業倫理と社会貢献の意識が横溢しており、看護対象者である「貧困層」に対して、患者の看護に留まらず患者家族の生活向上のための知識情報の提供、生活の規律化の勧めなど、教育・指導者としての役割を



LIVERPOOL QUEEN VICTORIA DISTRICT NURSING ASSOCIATION
Queen's Nurses

Queen Victoria distributing badges to Queen's Nurses of the Liverpool Queen Victoria District Nursing Association, 1897

Queen's Nurses waiting to enter Buckingham Palace, 1901. Queen Victoria established a tradition of inviting nurses to the Palace, which continued in subsequent reigns.

担おうとしていたことが記されていた。

この看護師のなかのエリートとしての矜持と教導者という自己認識、これがこの時期の地区看護師、クィーンズ・ナースを特徴づけるものであり、そうであるからこそ、堆積された貧困のなかに埋没して想像を絶するような環境のなかにいる患者の元に向き、まずは「ナーシング・オーダー」を作り出すための作業からはじめ、必要な器具がなければそれを工夫して作り出すというような活動を行い得たの

である。こうした活動に携わった当時のクィーンズ・ナースたちは、その後の巡回訪問看護の発展の礎を築いたのであり、まさにレジェンドを生み出していたのである。

写真資料出典

- Lewis, Jane (ed.): Labour & Love: Women's Experience of Home and Family 1850-1940, Oxford, 1986
Cohen, Susan: The District Nurse, Oxford, 2012